

C-75 近世初期に於ける小袖の風俗史的研究

(第2報)

——近世風俗画より見たる小袖の特色について——

桐丘女短大 三芳キミ子

1. 洛中洛外図にはじまる近世風俗図屏風は江戸時代に入って喜多院恥人盡絵となり、歌舞伎単紙絵巻となり、さらに四條河原夕涼図や舞踊図、婦女図(松浦屏風)又は彦根屏風、湯女図などさまざまの婦女図を展開して当時の服装美の様相を世のうつりかわりと共に私どもに示してくれるのであるというのが、明暦の江戸大火で焼失した豪華な服飾を、おぎなうにはどんなものが発展するかが興味ある問題であったが、そこに生れたのは染を中心とした大たんきわまる寛文模様であったし、その染雛形すらが刊本として出版されたのであった。今回はその推移を風俗画の上から実証してみようとするのである。

2. 叙上の風俗屏風のほかに本多平八郎絵姿をはじめ新撰雛形、その他のひいながた本と菱川師宣の浮世絵を利用した。

3. 縫箔、匹田かの子しぼり、すり箔等の粹微な技法が斬新な技法への染織の展開は非常事態をすくう唯一の道を如実に物語るものであることが知られると同時に、平和がつづくようになり町人の天下がだんだんと頭をあげることによって、江戸初期に寛文風をとりまぜたのが元禄服飾文化の第一歩であった事がわかった。